

遙かなる山 36 年間の軌跡を顧みて ペテガリ岳 東尾根 1967-2002

神原 照子



1966年、それまで近郊の低山を登っていた私は、個人での登山の限界を感じ、職域山岳部（旧富士製鉄室蘭）に入部を申し出た。そして翌1967年春の例会でのこと。部の指導者であるO氏から「君たちはペテガリ岳東尾根がいいと思うよ」という提言を受けて計画が練られたのだが、そのとき私には、日高の山やペテガリ岳東尾根についての知識は全くなかった。

そして、この年秋の初めてのペテガリ岳山行で強烈な洗礼を受け、辛酸をなめたことが縁となり、結果として計6回にわたって東尾根と関わりを持つことになるうとは、そのときは思いもしなかった。その間に、実に36年という月日が流れていた。この度、古い日記帳や報告文を読み返し、その記憶を辿ってみることにした。

第1回 1967年9月 珍しがられた女性。パーティ

9月14日 O氏夫人をリーダーに20代前半の女性3名が加わった「女性隊」は、東室蘭駅から夜行列車に乗り込んで、翌朝帯広駅に到着した。9月15日 そこから迎えのジープに身をゆだねたが、車に揺られながら曇り空が気になった。歴舟川に沿った道走る途中、砂金採りをしていたおじさんに声をかけられる。「あん

たら、女だけで行くのかい？」いかにも心配という表情で「道は悪いよ、気をつけて登っておいで」と登山口まで見送ってくれた。

ポンヤオロマップ川で水を満タンにして出発となったが、最初からの急傾斜で足並みも乱れがち。心配していたとおり、小雨が降り出して道の悪さに拍車がかかる。鉄梯子を上ったり、倒木にはナタ目が刻んであったり、道は予想ほど悪くはなかったが、ヒートする思いで銅板の標識のあるポンヤオロマップ岳頂上に着いた。しかし、この先、頂上からの下りはさらに悪路となり、傾斜がきつく四苦八苦の状態で先を目指す中、雨は次第に強くなりだした。それでも何とか早大尾根とのジャンクション・ピーク（J.P.）である1518m峰を越えたが、さらに進む中、メンバーの一人が遅れだし、次に私が不調になった。

寝台車で寝てきたというのに、何としても眠気に襲われ、両側が切れ落ちた稜線での行動は危険きわまりなかった。リーダーの判断で、予定の距離を進めないままにテントを張った。乾いた衣類に着替え、夕食をとり、重なるように身を寄せ合って一夜を過ごしたが、雨はいよいよ激しくテントを打った。

9月16日 ビバークさながらの厳し

い夜は明けたが、ここはまだペテガリ岳山頂手前2.5kmの地点であった。国境稜線に出てこの主稜線を辿れば山頂に着くはずだが、この雨の中での行動は無理で、やむなく撤退が決定される。

残念無念の思いは皆同じであろうが、帰路の行程も難儀満載であることは皆知っている。しかし、下山にかかる、登りでは20分に1回だった休みが、1時間30分に1回となり、体調は回復し、快調なペースで来た道を引き返した。

ポンヤオロ山頂で休憩し、山頂に捨てられていた重く濡れたワラジ数足を拾った。この先、登山口まではまだまだ長く傾斜がきついというのに、なんと欲張りなことであろうか。我ながら呆れてしまい、欲の深さに笑いが込み上げてきた。何度か尻もちを繰り返し、無事に登山口に着くと、約束のジープが待っていてくれた。その日は更別のN嬢の親戚の家にお世話になり、翌9月17日に無事に東室蘭駅に到着でき、山行は終了した。

第2回 1968年9月 再びの敗退

翌年、再びペテガリ岳東尾根の計画がもちあがった。リーダーは昨年同様O氏夫人。男性3人に加え、

厚顔にも私も手を挙げた。昨年と大きく違うのは、列車ではなくT氏の自家用車で行くことになった点で、大いに助かり、つくづく便利になったと感じた。

9月21日 夕方室蘭を出発し、日勝峠を経由し20時過ぎに清水町手前にあった空き家の工事小屋で仮眠する。

9月22日 早朝、小屋を出て帯広を過ぎると、日高の山々がモルゲンロートに輝いて美しく映えていた。車は順調に走り、ポンヤオロマップ川に沿った林道に入って間もなく、土砂崩れで林道工事をしている現場にゲートがあった。登山口まで7kmの地点だった。車はここより先には入れず、仕方なく装備を整えて歩き出す。1時間40分を要して登山口に到着。

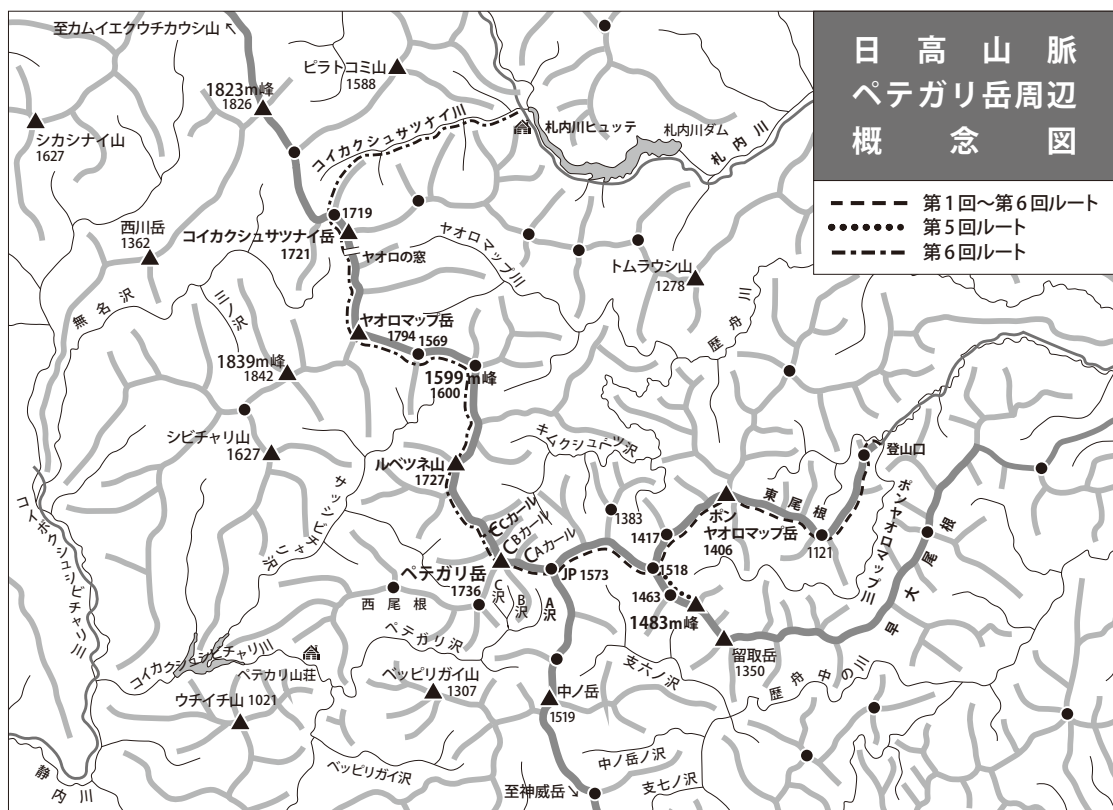
ポンヤオロマップ川で水を補給して登り始めるが、間もなく私の体調が芳しくなく、呼吸が続かない。仕事の疲れがあったのか。この先の辛さ、急傾斜の苦闘を知っているため、半端な気持ちでは登れない、と早々にリタイアを申し出た。トボトボと一人で林道を引き返し、車のデポ地に着いて間もなく「おーい おーい！」と人の声がする。何と同行のI氏ではないか！ 彼も早々にリタイアしてきたのだ。しばらくして、夕食の

ラーメンを作ろうとしたがコッフェルが無い。どうしたものかと考えた挙句、車のホイールキャップを外して鍋替わりにして作ったラーメンの味は……。

9月23日 小雨の中、メンバーが無事に登頂できたことを祈りつつ、登山口まで迎えに行く。しばらく待つて下山してきた3人は濡れた体で、悪路での格闘が窺えた。彼らは昨日、1518m峰から国境稜線までの距離のほぼ3/4の地点まで進んでテント泊。そして今朝早く、O氏夫人は単独でペテガリ岳に向かい、山頂を往復してきたとのことであった。

パラ、パラ、雨の音ではね起きる。また雨だ。なんてついでにないのだらう、真つ暗なテントの中で言いたいようないじめな気持ち。2年越しのペテガリ岳。雨が降っても構うものか行こう。と、きめると気持ちがあふれた。

他の2人はまだ眠っている。しばらく思索の末、私だけが気のすむように出かけることにする。テントを出ると思ったほどに雨は強くなく、何も見えない中をランプの明かりを頼りに歩きだす。歩くほどに気持ちが落ち着かず沢の音に追い立てられるように小走りになり何回となく



尻をつく。薄明りの中に稜線が見えた。頂上に着いたようにうれしかった。雨で顔に張り付く髪の毛をはらいながら義務のようにただ頂上に向かった。5 時 35 分、頂上に立つ。ガスに覆われ何も見えなかった。リングを 1 つ食べただけで山を下りる。キャンプ地 3・30 稜線 4・50 頂上 5・35 5・5・45

（O 氏夫人の報告書より抜粋）

下山してきた O 氏夫人は、途中で拾ったビニール袋を頭からかぶり、気迫に満ちた姿であった。「山はこうしてでも登るものだ」と言われたような気がした。2 度目のペテガリ岳もあつてなく敗退し、言い訳できない私であった。

第 3 回 1969 年 7 月 3 度目の挑戦で山頂に立つ

またしても翌年、今度こそペテガリ岳に登ろうと、1 回目に同行した N 嬢と 2 人でパーティを組んだ。3 度目ともなれば山の状態は大体わかってくるが、長丁場になることに変わりはない。

7 月 18 日 東室蘭駅発 8 時 25 分の列車に乗り、帯広には 14 時過ぎに着。予約の車に乗り、東尾根登山口には 17 時 30 分に着いて、そこにテン

トを張った。天気は上々、暑すぎるほどだ。

7 月 19 日 薄明るくなった午前 3 時起床、4 時 30 分にテントを出る。最初からの急傾斜はいつ来てもきつく、ゆっくり登るが、朝食べたラーメンは早朝の体に馴染まず、すぐに吐いてしまった。1121m 峰に近づくと、風も適当にあり、体調も良くなってきたが、ポンヤオロまでの登りはさらに長く続いた。

ポンヤオロマップ岳には 9 時 20 分に着き、大休憩をとった。間もなく、ペテガリ A 沢からペテガリ岳に登って下ってきたという札幌の大学生 4 人に会った。「俺たちはこんなひどい山、もう 2 度と来るものか!」と言いつつ、登山口目指して下っていった。ポンヤオロの下りも、足場の悪い尾根に変わりはなく、苦戦の末に 1518m 峰に着いて 2 人して喜び合った。

その後、かなり下ったところに 2 年前のビバーク地点を発見。あの時の山行を思い出しながら先を目指したが、2 人にとってこの先は未知の領域ということでもあった。次第にガスが濃くなる中、痩せ尾根上で足をとられ、小さなピークに荷をデポしてサブザックでペテガリ岳頂上を往復することにする。もう頂上に立つこと以外、頭にはないが、行けども

いけどもペテガリの頂上は現れない。さらにガスが濃くなり、風も出てきた頃、岩混じりの尾根が始めた。しばらく行ったらカール状らしいところに、シナノキンバイの群落がガスに浮かんで見えた。

「頂上直下にはシナノキンバイが咲き乱れ……」とあつた記録を思い出し、あと少し、と不明瞭な踏み跡を辿った。しかし、その先の踏み跡は複雑になっていた。「どうもおかしい?」と気がつき、しばし考え込んで 2 つ目のピークをガスの中に見つけた。そこがまさしく頂上であつたのだ。「やったー! ついに来た!」嬉しくて嬉しくて N 嬢は、祝杯をあげようと持ってきたポケットサイズのウイスキーを取り出した。すでに空腹の限界を超えた状態で一口飲んだウイスキーは、実によく効き、判断力を鈍らせた。早く下りたい一心で、元来た踏み跡を戻らずにまっすぐの踏み跡を下った。「おかしい?」と気がついて登り返し、山頂まで戻ったが、1 時間近くもタイムロスしてしまった。

正規の踏み跡に戻ったが、気は焦れどもさっぱり足が進まない。ドン・ドン時間が過ぎていき、辺りは暗くなり、踏み跡は不明瞭、尾根の両側は急峻に切れ落ちている。ガスで濡れた体では力が入らない。それでも、痩せ尾根の上り下りを繰り返す中、



ポンヤオロマップ岳から日高国境稜線の山並みを望む 2000 年 6 月

ポンヤオロマップ岳を目指して 1998 年 11 月



途中で大きめのビニールを拾った。しばらく歩いたが、暗い中「もう限界」と悟り、20 時 30 分、拾ったビニールを下にサブザックを敷いてビバークに入った。両脚を谷側に降ろし、身を寄せ合って励まし合う。体は濡れて冷えだし、脚はガタガタと震える。頂上で呑まなきやよかつたウイスキーで時々暖をとりながら、厳しい一夜を何とか過ごした。今という低体温症寸前であつたかもしれないが、24

歳という若さと、7 月という季節に助けられたのかもしれない。

7 月 20 日 気を取り直して歩き出すと、何としたことか、10 分も歩くとデポ地の小ピークに到着した。あと 10 分頑張れば、暖かい衣服、熱い食べ物が出ていたのに……。パンとシチューで胃袋を満たし、少しは元気の出た体で、一路下山の途についたが、前日の 16 時間に及ぶ行動は、未熟な計画、予知能力の欠落等、反省点が

なんとしても多すぎた。しかし、凝りもせずに 3 度も挑戦してペテガリ岳山頂に達した喜びは、忘れることができないものである。

第 4 回 1998 年 10 月 5 日 ポンヤオロマップ岳の往復

3 回目にしてようやくペテガリ岳に登った 1969 年 7 月から、28 年もの歳月が過ぎ去っていた。東尾根はもはや遠い昔日の記憶の中であつたが、「ポンヤオロマップ岳までで行つてみたい」という仲間の言葉に押されて計画を練った。

10 月 31 日 山慣れた 5 人のメンバーが揃い、2 台の車で夜に出発する。途中、剣山小屋で仮眠をとった。11 月 1 日 28 年ぶりに来た東尾根登山口は変わりなく、「ああ、また来たのか」と感慨深い。ここまで車が入れたことに感謝しつつ、出発は 8 時 30 分。相も変わらぬ急登が続くが、日帰り装備で荷の軽さが何より嬉しい。中間地点の 1121m 峰には 2 時間で着いた。その先のポンヤオロまではさらに急登が続くが、2 時間もあれば着くだろう。

ポンヤオロマップ川を挟んで左手の早大尾根に突った頂が見え出した。「あれが 1483m 峰だ」とため息が出る。三角点はないが、十勝版の新聞に日高山脈無名峰の一つ

として紹介されていたピークである。いつか登りたいと心に決めた。

ポンヤオロマップ岳山頂では「やったね!」と登頂の喜びに浸った。下山の足取りは軽く、2 時間 40 分で登山口に着き、順調にその日のうちに我が家に着いた。

第 5 回 2000 年 6 月 1483 m 峰を目指して

6 月 8 日 念願の 1483m 峰を夫と 2 人で登る日がやってきた。シゴキ覚悟の山行になるだろう。19 時過ぎに家を出て、いつもの剣山小屋を利用し仮眠をとる。

6 月 9 日 順調に走り、5 回目の登山口に着く。夫は 7 時、私は 4 時の水を用意し登り始める。いつものきつい登りに喘ぎながら上を目指すが、先に行く相棒の姿はとくに見えない。クマが出るかもしれない深い山に独り残して心配でないのかい……? ポンヤオロには 6 時間 45 分を要して到着。テン場を 1417m 峰の下にある平坦地と決め、険しく急峻な踏み跡を下ると、残雪の傍にテントはすでに張られていた。

6 月 10 日 テン場を 5 時 45 分に出る。30 分後、早大尾根との J.P. 1518m 峰に着き、ここからが本番の始まりだ。踏み跡はあるはずもなく、両側が深く切れ落ちた早



ピークであった。
6月11日 今日は一日をかけて帰るだけ。目的達成！気は軽く、下山後、入浴、食事を愉しんで夕方、無事我が家に到着した。

*

大尾根上のハイ松を渡り歩いては落下を繰り返した。中間地点にある1463m峰を乗り越えた。目の前には1483m峰が聳え立ち「まるでマッターホルンようだ」と記録する人もいて、見るからに急峻なスラブ状の壁がある。ここで、一気に気合を入れられる。灌木につかまり、足場を固め、決して落ちてはならない壁に取り付いて、やつとの思いでピークに立つ。

故一原有徳さんから生前、「貴女に差し上げます」と二冊の本が送られてきた。すっかり日焼けして変色してはいるが、北大に次いで厳冬期第2登を成し遂げた早稲田大学山岳部の『ペテガリ岳遠征記』であった。昭和23年5月発行、小島六郎編著とある。最終の第6キャンプから頂上アタックまでの箇所を何度も読み返した。

一月十六日 曇、風強し。(中略) 食糧と燃料がもはやギリギリのところ迄きており、是非とも今日は行かなければならない。(中略) 約二十分くらい猿のように木を伝って下り、さらに岩と雪のミックスの難関を通りぬけ、一五〇八米峰(現在の1518m峰か?) (中略) 風が強いのでザイルを付け、(中略) コンテニアスで最後の登りにかかる。アイゼンの歯が軽くささる程度で雪は固く、快適な登行(後略)

遠征記本文中の標高値は現在とは異なっているが、おそらく最終キャンプは1463m付近のはず。戦後間もないこの時期に、1カ月余りを要する苦闘の末、登頂したのだ。この遠征をきっかけに「早大尾根」と呼ばれるようになっていくことに深い感銘を受けた。

第6回 2002年6月

コイカクシユサツナイ岳からペテガリ岳へ 東尾根を下る

このときの計画の目的は、日高山脈の主稜線の中で私にとってまだ空白となっていた、ヤオロマップ岳、1599m峰間をつなぐこと、そして、もう若くはない体で、たぶん最後となるであろうペテガリ岳東尾根



を迎えることであつた。メンバーは親しい仲間6名となつた。
6月21日 先発隊として東尾根登山口に車を回し、札内川ヒュッテに全員が揃ったときには21時を過ぎていた。
6月22日 小雨降る中、雨具を着てコイカクシユサツナイ川の遡行開始。2時間強で上二股に着き、いよいよ急尾根の開始となるが、雨で滑る道は登りづらい。コイカクの肩に出てても視界が悪く、気温6℃と寒い。もう少し進みたかったが、雪の残ったヤオロの窓をテン場とする。
6月23日 今日小雨。視界が悪い。テン場からヤオロマップ岳山頂を目指すが、大きな岩ありブッシュありで、こんなに悪かったかな……。雨

ペテガリ岳山頂直下の稜線を進む
2002 年 6 月



を含んだザックがやけに重くなる。1599m峰まで瘦せた岩稜帯が続く、ブッシュをかき分け、ようやくルベツネ山に到着するが、テン場予定のCカールまではもうひと頑張り、あと少し、もう少しだ。17時30分、Cカールにテントを張った。

日も雨具を着て出発したが、幸いにも風がなく助かった。しかし、ブッシュにつかまる軍手はすぐに濡れ、雪の冷たさが指を麻痺させる。ペテガリ岳山頂で笑顔のない記念撮影。まさか6月末に雪に遭うとは誰が予想しただろう。

雪の中になげにもヨツバシオガマが咲く中、東尾根とのJ.P. 1573m峰を目指して国境稜線を下っていくが、誰一人弱音を吐く者はいなかった。その後の東尾根の長いこと、長いこと。滑って転んでようやくポンヤオロに着いたのは17時20分。16時間行動で、登山口には21時を過ぎて着いたが、ここで行動は終わらず、その足で札内川ヒュッテに車を回し、休憩もせずに我が家に帰り着いたときには、翌朝の5時を回っていた。

6月の雪の寒さに震えながら歩き、一度も雨具を脱ぐことがなかった3日間の山行。最後の東尾根

となつたこの山行は忘れることができず、この先もたびたび思い出すであろう。ペテガリ岳の頂には計8回達しているが、後になって、山頂の三角点の埋石は柴崎芳太郎測量官等によることを知った。その苦勞を偲び、今一度「迎天狩岳」の標石に会いたいが、今となつては叶わない。

*

雪のペテガリ岳山頂 前列右が筆者
2002 年 6 月



しさや充実感の深さを、他のどこよりも多く教えてくれた日高山脈。かけがえのない存在である。

「緑は国の宝なり」。心ある登山者にとって、この先も魅力溢れる緑豊かな日高山脈であつてほしいと願っている。

